

グループ研究事業報告書

1. 研究会

研究会の名称： だち窯やネット研究会

研究のテーマ： 快適な住空間を創出する「癒し」系商品の開発と販路開拓についての研究

研究会の構成員： 別紙1参照

研究の目的：

美濃焼業界は、長引く消費不況と低コストの中国製品の輸入増加から不振が続いており、従来の食器を主体としたマーケット戦略では、自ずと限界があり業界のじり貧傾向に歯止めがかからない状況となっている。

そこで、グループ「だち窯やネット」は打開策として、「脱食器」を目指し、「癒し」を切り口とした新商品の展開により販路拡大を図る。その為に、デザイン先進国であるイタリアの著名デザイナーに依頼し、ヨーロッパの感性と和の感性といえる美濃焼の伝統的素材・技術を融合した新デザインによる新商品開発を行う。

開発商品は、平成16年9月開催の東京インターナショナルギフトショーに展示発表し、市場性と販売手法の調査を行う。また、引き続き、ラピロス六本木「ギフトベスト」での展示、専用ホームページでの紹介によって消費者のニーズの調査を行う。

2. 研究会の実施状況

研究会の開催

・第1回研究会

日時： 平成14年10月30日（水曜日）12：30～15：00

場所： セラテクノ土岐 会議室（土岐市）

出席者： 9名

概要： 事業の内容の説明と今後のスケジュールの確認

ジョバンニ・チマッティ氏が作成したデザイン画から、試作するものの形状と加飾のデザインを選定した。別紙2参照。

・第2回研究会

日時： 平成15年 2月 5日（水曜日）13：00～19：00

場所： 窯元4軒 各作業場（土岐市駄知町内）

出席者： 8名

概要： ジョバンニ・チマッティ氏が窯元を訪問し、それぞれの試作品について指導をした。内容は別紙3参照

・第3回研究会及び評価委員会

日時： 平成15年 3月18日（火曜日）18：00～19：30

場所： 駄知印判館（土岐市清山陶舎）

出席者： 10名

概要： 各窯元より評価委員に試作品の説明し、評価委員から評価を受ける
別紙4参照

3. 研究の成果

・研究の経緯

長引く不況による消費の減少と、中国製品の輸入増から、美濃焼の現状に危機意識を持っており、「脱食器」を目指した研究の必要性が生じた。

従来の美濃焼の枠にとらわれない、「癒し」をテーマにした新商品開発を行うために、外国人デザイナーによるデザインを採用することとした。デザイナーは、土岐市の姉妹都市イタリア、ファエンツァ市の窯業大学の教授であり、陶芸家でもあるジョバンニ・

チマッティ氏を選定した。

- ・ 研究成果の説明

チマッティ氏のデザインを基に、美濃焼の作家である会員が美濃焼の伝統の志野・織部を使って焼き上げた。

「癒し」のテーマについて、デザインは水の雫、海の静けさ・波紋の広がりを表現した。

チマッティ氏は、個別の花瓶を想定してデザインしたが、試作品を見て「4本セットで並べてもデザイン的におもしろい」と評価いただいた。

織部の部分を並べ替えることで、「癒し」を表現することができる。

- ・ 研究によって得られたこと

日本とイタリアの陶芸家が共同で一つの作品をつくる事業は、世界的に稀なことである。外国のデザイナーとの共同開発法のノウハウを得られた。

- ・ 研究成果の今後の活用法

花瓶と灯りのオブジェ

東京ビッグサイト 東京国際ギフト・ショーに出展予定

平成15年9月2日～5日 開催

寄せ植え鉢とかがり火

セラミック・パーク MINO ガーデニング・フェスティバルに出展

平成15年6月13日～16日 開催

引き続き土岐市陶磁器試験場より技術指導を受け、事業を継続する。

以上

別紙 1

だち窯やネット構成員

清山陶舎 土岐市駄知町 2321
河合竹彦 陶芸家
河合法子

宗山窯 土岐市駄知町 2315-22
若尾洋造 製陶業
若尾美加子

丸達製陶所 土岐市駄知町 2321-148
丹羽 均 製陶業
丹羽章子

メイクラフト 土岐市駄知町 2524-28
籠橋起久雄 陶磁器産地卸売

土岐市陶磁器試験場職員
渡辺 隆

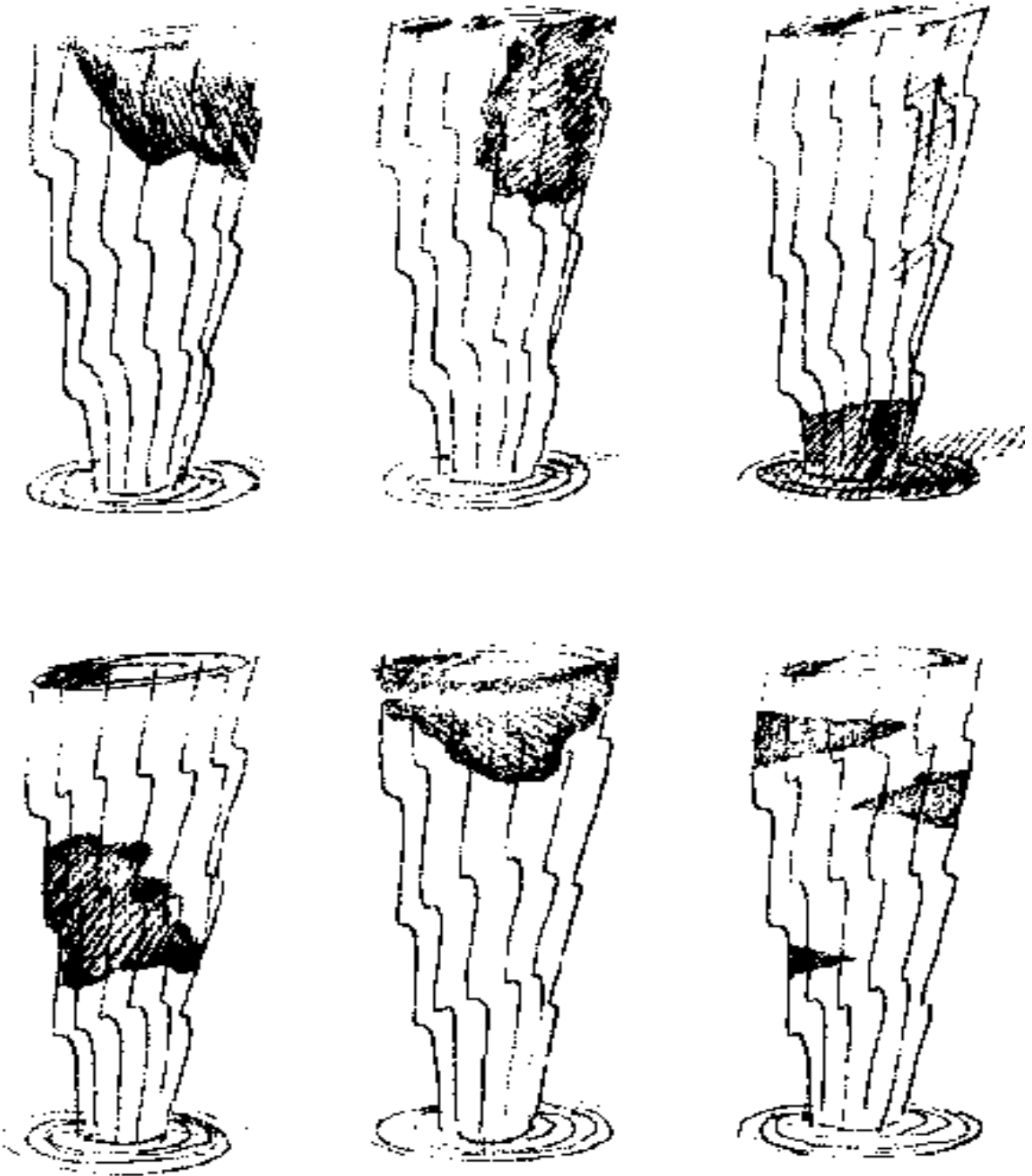
顧問

陶庵 土岐市下石町 328
大橋康雄 岐阜県陶磁器デザイナー協会会長

評価委員

かね吉 愛知県瀬戸市鹿乗町 490 番地
横地秀雄 陶磁器消費地小売

アトリエM & E 名古屋市南区星崎町阿原 343
浅見悦子 テーブル コーディネーター



NEL MARE DELLA
TRANQUILLITA'

A handwritten signature in black ink, appearing to be 'G. G.' followed by a horizontal line.

ジョバンニ・チマッティ氏のコメント要旨

1. 窯元訪問

(清山窯)

- ・(チマッティ氏デザインの試作品を見て)思った通りのイメージのものが出来た。色、形、質感、重さなど完璧である。とても満足している。
- ・この作品のテーマは癒し。水のしずく、海の静けさ、波紋の広がりなどを表現している。
- ・イタリアの良いデザインと日本の良い職人のコラボレーションですばらしいものになった。こうした陶芸家どうして一人がデザイン提供し、もう一人が作陶するという試みは世界初ではないか。
- ・4点の作品を1点に絞るのではなく、2点又は4点の組み合わせで売ってみてはどうか。
- ・これが完成形ではなく、何度も焼き続けてるうちに、更に良いのになっていくだろう。

(丹山窯)

- ・(チマッティ氏デザインの花瓶の失敗作を見て)清山窯と何が違っていたのか?土か?焼く温度か? 温度は同じくらいで、土が違い柔らかいと説明
- ・必要であれば、デザイン通りでなくても台座部分は厚くしても構わない。イタリアの土と日本の土は違うのだから。
- ・(会員の作品を批評して)「灯り」のフードに穴があいているのは、中の光を投影するためか?であるなら、穴の大きさ(花びらの形)は統一した方が良い。イタリアでは、そうしたデザインの統一性にこだわる。
- ・電源を取るためのコードは、穴を通すようにした方が、保安上良いのではないか。

(藤山窯)

- ・(会員の作品を批評して)自然石をイミテーションしたデザインは良い。ただ、もっと光沢を無くして、石のゴツゴツした感じを出した方が良い。一見、石に穴があけてある!という驚きが有ると良い。
- ・そのためには、穴をもっとシャープにあける。角度を鋭角にして、上から見えなくすると中に吸い込まれるように見える。
- ・土は、もっときめの細かいものを使うと、切り口がよりシャープになる。石らしさの表現は別の形でやれば良い。

(宗山窯)

- ・寄植え鉢は、東洋的でデザイン、色彩は特異なものを感じる。
- ・特に、赤色は高温焼成にもかかわらずすばらしい色が出ていると思う。
- ・形状については、もう少し改良の余地が有る。
- ・花を植えやすい形状を工夫すべきではないか。
- ・かがり火スタンドは、実用なのか、装飾用なのか、はっきりしたほうが良い
- ・陶磁器で作る場合は、装飾用を期待されているのではないか。
- ・もっとボリュームを持たせたほうが良いと思う

2. 講演会（セラテクノ土岐）

- ・日本の「楽焼き」の技法を元に灰でいぶしたアメリカの「ラク」の技法があり、それにイタリアのデザインを導入した「ラク・ドルチェ」を開発した。「ドルチェ」は優しさ、静けさを意味している。
- ・イタリアでは日本より低い温度で焼き付けている。日本 1200 、イタリア 900 。
- ・イタリアと日本の陶磁器の違いは、イタリアは磁器、日本は陶器であること。特にフィエンツァの磁器は衝撃に弱く、食器には向いていなかった。そこで食器ではなく装飾用に転向した。装飾なら強くなくても良いし、高くても買ってくれるから。
- ・日本の陶器は毎日の食事に使うもので、テーブルに色々な形・色の食器を乗せていておもしろい。イタリアではお皿が 2 枚とグラスしか置かない。
- ・イタリアも若者を中心に食生活が変化してきていて、それに伴い食器も変化してきている。色は白のみだったが、最近はシンプルな色のものや人工的でない土の感じが出ているものなどデザインにも影響が出ている。しかし、茶色や黒など濃い色にはならない。形も、手作り風で遊びがあるものが出てきている。
- ・フィレンツェの伝統工芸マジョリカ焼きは、独特の形と絵付けが特徴で、色彩が華麗でデザイン性も優れている。焼き方は、固い釉薬を使うため、施した模様が動かなくなる。凸凹した表面をサンドペーパーで磨いてきれいに仕上げしてから焼き締める。
- ・マジョリカ焼きは、描画の精巧さと色彩の華麗さが特徴だが、お皿にすると高台から水が漏れてしまうので実用性はなく、あくまでも装飾用である。

評価委員会

(大橋委員)

- ・ イタリア人デザイナーのチマッティ氏は、かねてから日本の陶磁器は、技術は素晴らしいモノがあるのにデザインが残念だと言っていた。今回、イタリアのデザインと日本の伝統的な技術を組み合わせ、素晴らしいモノが出来たと思う。
- ・ 今回の研究会テーマである「癒し」というモノは、従来の陶磁器には無い概念で、我々の知らない世界への挑戦であった。こうした機会をもらって、自分たちの中に取り入れることが出来るきっかけになったのではないか。
- ・ これだけの物が出来て満足している。

(浅見委員)

- ・ 異なった世界同士の交流から生まれる物がある。とても良いことだと思う。
- ・ テーマの「癒し」については、これらは「癒し」系というよりも「楽しい」系だと思う。「灯り」については、灯りをつけてみるとまた違った印象があるかもしれない。
- ・ 寄せ植え鉢も、実際に花や植物を植えてみるとどうなるか。

(横地委員)

- ・ (売り手の立場から)日本人は、季節感を大事にするので、季節感があって遊び心のある物(陶人形など)は、食器よりも衝動買いを誘いやすい。
- ・ 商業ベースにのるコストで、季節感のある遊び心あふれるものにしていくと良いのではないか。
- ・ これからの課題は、これをどうやって売っていくか。せっかく創ったものだから売り方も考えていく必要がある。

3回研究会

- ・ 「かがり火」は、別に焼いた物を実際にかがり火を付けてみたが、とてもいい雰囲気だった。ただ、硬い土で焼いたのに、2時間くらいで割れてしまった。実際に燃やすとなると強度の問題がある。強度を強くして、完成度を高めれば需要はあるのではないか。
- ・ 「寄せ植え鉢」で、チマッティ氏の指導は、外側を黒、内側を赤かオレンジ色にということだったので、赤にしてみた。(オレンジ色は釉薬が高くて出来なかった)呉須の大鉢といった感じ。ただ、実用品なのか装飾用なのか。
- ・ 「灯りのオブジェA1」は、チマッティ氏の指導で釉薬を付けずに焼いてある。灯りとしてだけではなく、フクロウの置物としても、いい感じではないか。サイズも大・中・小と揃えてみて。試作品は、羽根の穴を揃えて作ったが、商品化するとなれば、むしろ穴は不揃いの方がいい感じになると思う。
- ・ 「灯りのオブジェA2」は、チマッティ氏の指導では、「もっと石の素材感を出してはどうか」ということだったが、思ったほどは出なかった。あかりというより、花器のイメージで創った。
- ・ 「灯りのオブジェB」は、暗闇に桜の花びらが舞い散るイメージ。緋色がうまく出なかったのが残念。
- ・ 今年度は、商品開発で1年が終わってしまった。このまま終わってしまったら意味がないので、次は、これらを実際に商品化して、実際に販売していかなければいけない。